

見えない排除に気づく  
～真の多様性と平等とは～

ふだん何気なく使っている言葉が「差別」につながっていることがあります。あなたは差別を受ける側の心の痛みに気づいていますか。今号は日常に潜む「見えない排除の実態」をわかりやすく説明したエッセイの紹介です。

差別はたいてい悪意のない人がする  
——見えない排除に気づくための10章

2021年 大月書店

キム・ジヘ (著)、尹 怡 景 (訳)

[1200-3]

## 著者紹介 (出版当時)

江陵原州大学教授(マイノリティ、人権差別論)。移民、セクシャルマイノリティ、子ども、若者、ホームレスなどのさまざまな差別問題に関心を持ち、当事者へのリサーチや政策提言に携わっている。ソウル特別児童相談センター、韓国憲法裁判所などでの勤務経験を持つ。初の単著である本書がベストセラーになる。

## 決定障がい

「ぐずぐずと何ごととも深く考えすぎてしまう自分」をさす簡潔明瞭な言葉だと思い、著者はこの言葉を、さまざまな場面で何度も使っていた。討論者として参加する「ヘイトに関するシンポジウム」でも、自分を卑下する意味を込めて使っていた。

ある日、シンポジウム終了後に参加者のひとりにそっと尋ねられた。「なぜ決定障がいという言葉を使ったのですか」と。それは多くの「障がい者」が参加している会場で、「障がい」という言葉を使っていた矛盾に対する指摘であった。

「ヘイト表現をやめよう」と訴えていたにもかかわらず、「障がい」という言葉をどのように使っていたのか、その意識すらしなかったことに気づく著者。すぐに「障がい者の人権運動をする活動家」に「障がい」という言葉を使用する際の問題点と、言葉が与える影響の説明を受けた。説明は、「障がいという言葉は不足や劣等を意味し、そのような観念のもとで、『障がい者』はつねに、何か足りない劣る存在として見られてしまう」というものであった。彼らが置かれた状況がある程度知っていると思っていた私が、彼らを差別する側にいたなんて……。この出来事をきっかけに、著者は何気ない日常に潜むあらゆる差別について考え始めた。

自分自身の身近な場面を振り返ると、以前の職場のネームプレートが正規職員と非正規職員で色分けをされていたことを思い出した。正規職員とは異なった色のネームプレートをつけた自分は毎日、出勤から退勤まで、「正規職員とは異なる非正規職員」としての烙印を押されたような日常生活を続けていた。その差別に気づいてさえいなかった正規職員。差別はつねに、不利益を被る側の話であり、受ける側だけの問題のように扱われる。自分が持つ特権に気づいていない「マジョリティ」には見えることのない「差別」。何気ない日常にも「排除している」とは気づかない状態で、「差別」は多く存在している。まったく、悪意のない人たちで。

## 鳥には鳥かごが見えない

細い針金で作られた鳥かごの内には、鳥かご全体は見えない。見るためには後ろに下がって全体を見なければならぬ。鳥かごが鳥の飛行を妨げていることに気づかないように、抑圧や偏見という鳥かごにとらわれている人もまた、飛び立つことができないということに気づいていない。差別される当事者が消極的に行動することで、社会における差別的な構造は自然に維持される。

## 現在の不平等な社会は私たちにとって快適なのか

差別が構造化された社会のもとでは、個人がする差別や慣習は悪意を持たず、無意識のうちに差別をする行動が取られている場合が多い。だれもが努力すれば成功できるという希望を与えられ、構造的な問題は個人の努力で解決せよと不当に誘いかけられても、人は人々に認められるために、少しでも「社会的成功率」を上げようとする。不平等という社会的不正義に対する責任を、「差別を受ける個人に負わせる社会」。そんな社会での「個人の人生」は息苦しく、不安につながる。

## 日常に存在する差別を知るために

「白人人形」と「有色人種人形」で行った「人種問題」の実験結果や、障がい者、セクシャルマイノリティの現状、大学序列化の弊害など、豊富な資料で「差別」をわかりやすく綴る本書に、平等な未来へ進むための「道しるべ」を見つけた思いがする。

私たちは今、差別の存在を否定するのではなく、もっと差別を発見し、差別を受ける側の人々の思いを知らなければならぬ時代に生きているのだ。著者はエピローグに「出ていけ」と叫ぶのではなく、皆を歓迎してともに生きる、開かれた共同体としての私たちをつくりたい」という思いを記している。

本書で得た学びを、「差別に気づく努力」につなげていきたい。(ぼっと)、(みっと)

